

心の架け橋

白百合学園高等学校 二年 藤田 紗衣

月の存在。普段はあまり意識されないが、どんな時も私たちを優しい光で包み込んでくれる。

鋭い日差しの中、異国の言葉が飛び交う。つたない英語で懸命に会話をする。私はこの夏、異国の地で、異国の言葉で、意思疎通をする機会を得られたことへの楽しさを感じながら過ごしていた。日が沈むとともに昼間の喧騒がまるで嘘だったかのようになり静まり返る。ホストマザーにおやすみを告げ、布団に入り一日を振り返る。楽しかった思い出が溢れてくる。その昼間の充実感が、夜一人の私を襲う。日本にいる家族や友人の顔が瞼の裏に浮かぶ。どうしようもないほどの郷愁が胸の中に溜まっていく。そんな夜は窓の外に浮かぶ月を探す。日本と変わらず静かに輝く月。目まぐるしい変化の日々の中で、いつも変わらずにあり続ける月が、私の心の拠り所となっていた。優しい月明かりが私の心を照らしてくれる。日本の空の下で、誰かもこの月を見ているかもしれない。そんなささやかな期待が、私を孤独から救い出してくれた。

「また月を見ているのね。」

外に出て月を眺めていると、私の様子を気にしたホストマザーが声をかけてきてくれた。私は感傷に浸っていた自分を見られた気恥ずかしさから

「月があまりにも綺麗だったから。」

と焦って言った。その言葉は決して嘘ではなかった。この地で見る月は今まで見てきたどの月よりも強く輝いて見えた。

少しの沈黙の後、彼女はぽつりと言った。

「夫が亡くなった時、私もよくこうして月を見ていたわ。」

彼女は夫を亡くして以来、一人で生きてきた。そんな彼女もまた、この月を見て、大切な人を想っていたのだ。月に思いを託していたのは私だけではなかった。人には誰しも、月を見て、大切な誰かを想う瞬間があるのかもしれない。

「月がある限り、私は寂しくないわ。この世界の誰かも、きっと、同じように月を見上げているだろうから。」

そう言って微笑んだ彼女の横顔は、寂しさを帯びながらも、力強く感じられた。彼女が今まで孤独に耐え、月とともに乗り越えてきた姿が想像できた。世界のどこかで、私たちと同じように孤独を感じ、月に慰めを求めている人がいるかもしれない。そう考えたなら、世界中に仲間ができたように思えた。明日へ踏み出す勇気を得られた。月が私を世界と繋げてくれた。

私たちはまた、空を見上げた。夜空の中で、月は変わらず柔らかな光を放っていた。そしてその光が私たちをそっと包み込んだ。

ある日、いつもと同じように月を見ていたら、不意にある一つの和歌を思い出した。

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」

遣唐使として唐に渡った阿倍仲麻呂が詠んだこの歌には、唐から見る月を通して故郷を懐かしむ思いが描かれている。彼もまた、異国の空の下で、月に思いを託したのだ。言葉も文化も異なる世界に身を置きながら故郷を想った彼の心と私の心。この二つの心が、千年以上もの時を超え、重なった。

この和歌がなぜ、時を超えて人々の心を打ち続けているのか、この経験を通して、私はその理由を真に理解することができた。それはこの歌が、月を見て故郷に思いを馳せる人々にどんな時も寄り添ってきたからではないか。誰しもが孤独を抱え、月にすぐることがあることをこの歌が教えてくれた。

月は世界だけでなく、悠久の時をも超えて私たちの心を繋げてくれる。月はいつの時代も常に、平等に私たちを照らし続ける。だからこそ、私たちは月に大切な人の面影を映し、思いを馳せ、繋がりあうのだと思う。月は人と人を繋ぐ架け橋なのだ。

これからの人生で、私は再び遠い土地で過ごすかもしれない。見知らぬ土地で孤独に震えることもあるかもしれない。そんな時は、きっと、また月を見上げるだろう。見上げれば、月が柔らかな光で私たちを包み込み、私たちの心を繋いでくれるだろうから。